SHINCLUB 187

(株)辰　東京都渋谷区渋谷3-8-10　JS渋谷ビル5F　tel/03-3486-1570　fax/03-3486-1450

「目黒 M 邸」　撮影：アック東京

今月のトーク/monthly talk

松

今月の写真の「目黒 M 邸」では、新しくご自宅を建て替えられることになったお客様が、以前のお庭にあった松を「ぜひ残したい」と希望されました。長く育った木には、何かが宿ると言われます。大きくたわわな幹から伸びた見事な枝や輝く美しい青緑の針葉は、ご家族の記憶の中になくてはならないものとなっていたことでしょう。

どの部屋からもこの松を眺められるように、松を中心に建物が配置されていることからも、この木を愛するお客様の気持ちがわかります。

「松」は、日本人にとって最も身近な樹木の一つです。日本三大景観の松島や天橋立、宮島は、いずれも豊かな松の木々が風景の中心であり、「白砂青松」として、詩歌や絵画にもその風光明媚な光景が描かれてきました。長寿の象徴として、神の下りてくる依所として、特別な意味を持つ木です。「松竹梅」という言葉も示すように、ある意味で位の高い樹種でもあります。正月には門松を玄関に飾り、能や歌舞伎の舞台の背景には必ず描かれる、日本人の生活になくてはならないものです。

文化面だけでなく、松はやせ地、荒地で最初に育つ木であり、海岸の砂防林や、防風林としても役に立っています。松脂はテレピン油の原料となり、「松明（たいまつ）」は大事な明かりでした。マツタケなどほかの植物を育てる共生力も持ち合わせています。固い樹皮はチップにされて、園芸用に利用されています。

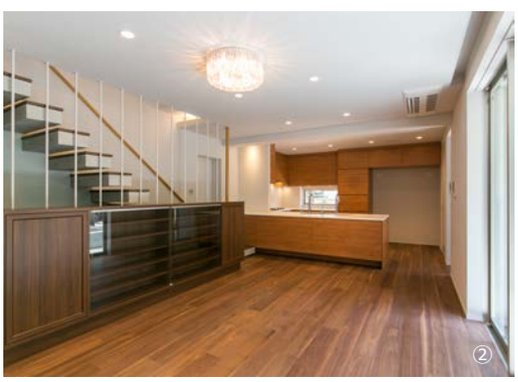
常緑針葉樹としてはほぼ北半球全体に分布しており、日本的な景観を形作るものとしては、クロマツ、アカマツ、ゴヨウマツが代表的なものです。人工林の樹種としてスギ・ヒノキに次ぐカラマツは、土質を選ばず、耐寒性があり、生長も早い木です。北海道や本州山岳部に多いのですが、実は同じマツでも、マツ属ではなくカラマツ属で、日本の針葉樹で唯一落葉する木です。他にもマツという名前が付きながら、トドマツ（モミ属）、エゾマツ（トウヒ属）、ベイマツ（トガサワラ属；米国原産）のように、種類は違うものがあります。また、建材としては、北米などからの輸入材のパイン材がいわゆる松ですが、家具に使われていることが多いようです。

景色として忘れられないのは、東北大震災の後、岩手県陸前高田市に残った「奇跡の一本松」でしょう。震災復興の願いを象徴するものとして、保護の声が高かったのですが、結局根が腐ってしまい、その後、モニュメントとして保存されることになりました。

細い葉、曲がりくねった幹、武骨な幹の木肌、簡単には触らせてくれない、荒々しくそして繊細な木の魅力。曲がりくねった木を、思う形に作り上げるには、それなりのテクニックが必要です。盆栽にはその究極の技が活かされています。その複雑さが日本人に合っているのではないかと感じます。

東北では害虫被害が増えていると聞きますが、日本の景観を作る観光資源でもある「松」、これからも大切にしていきたいものですね。

目黒M邸



家族への思いをつなぐ松の木

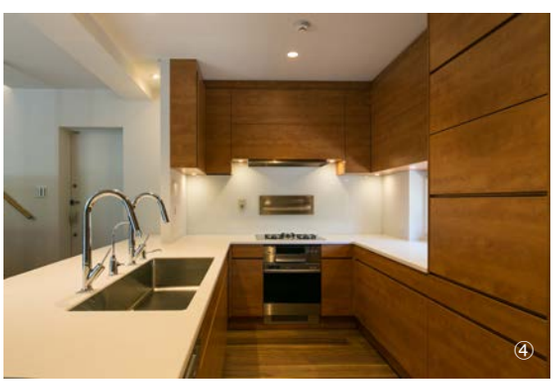
築約 60 年の木造 2 階建の住宅には、大きな松のある前庭があった。建替えにあたって建て主は、「家族を見守ってきたこの松だけは、ぜひ残したい」という希望をお持ちであった。そこで、奥様の好きな「ビュッフェ絵画」のようなモノトーンの色調や鋭い線を活かした、耐震性のあるコンクリート打ち放しの建物が、この松を囲むようなプランとし、各部屋の大小の開口部を通して、様々な表情の松を楽しんでいただけるようにした。

また、建て主は、親御様より受け継いだ土地に新たに建てる建物が、将来の２世代、３世代同居を視野に、玄関・キッチン・バスルームを大きく一つにし、次の世代にそのまま受け継がれていくような住宅を望まれた。息子さん世帯は別に住居もあるが、一緒に住む期間を想定し、プライベートな部分以外は、むしろ広くいろいろな場所が点在している、フレキシブルな空間で、一家団欒の機会をより有効に作り出すことを望まれた。元の住宅にはなかった地下や屋上の部分が、その余裕を生み出している。

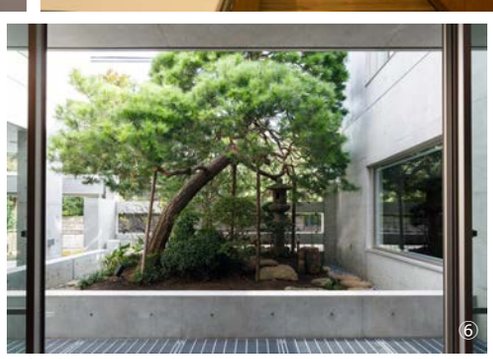
内装については、コンクリート打ち放しの雰囲気を活かし、玄関の壁には本実の打ち放し部分を設けたり、2 階への階段は片持ちにしたり、と新しいものを楽しんでいただく一方、書斎の壁の一部には、以前の家の壁の板材を貼って照明を残したり、和室の床の間の長押は以前の家で使っていたものを採用している。古いもの、昔から大切にされているものを大事にしたいという建て主の思いが反映されている。

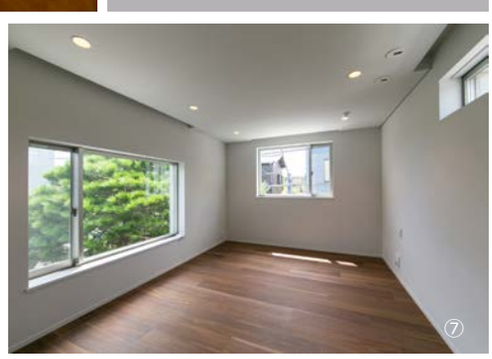
外構の土留にも大谷石の部分を残し、行きかう近隣の方からも「松や壁が以前のお宅の面影を感じさせる」と好感されているようである。

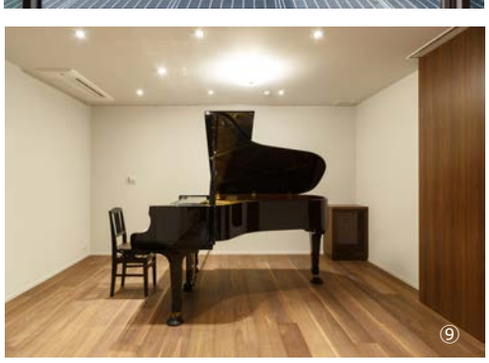
（田中朋久氏　談）

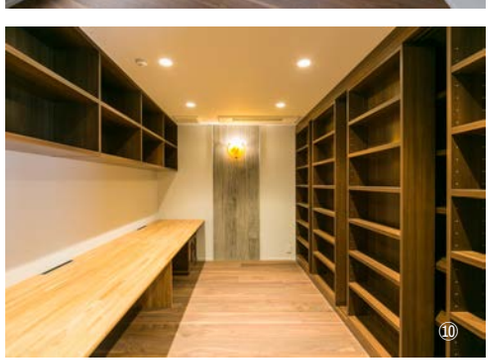


所在地：目黒区
構造：RC造
規模：地下１階、地上２階
用途：専用住宅
設計：田中朋久
　　／田中朋久建築設計事務所
施工担当：鈴木
竣工：2015 年８月









①南西側外観②リビング③玄関。正面に本実型枠のコンクリート打ち放しの壁、右手の窓より中庭を臨む④大きくゆとりのあるキッチン⑤横格子の鉄製門扉と玄関⑥リビングより見る中庭。松の脇に灯篭もあり、以前の庭の趣を残す⑦個室⑧和室。床の間の長押は以前の家のものを利用⑨プレイルーム。グランドピアノも搬入⑩書斎。正面の壁の木材と照明も以前の家のものを採用

一歩ずつ丁寧に道を拓く

田中朋久／田中朋久建築設計事務所

田中朋久氏　自宅事務所にて　撮影：アック東京

①鎌倉の家　©Shigeo Ogawa

Tomohisa Tanaka

今月は、「目黒 M 邸」を設計された、田中朋久氏にお話を伺いました。ご自宅は、落ち着いたたたずまいの二世帯住宅で、なんと吉村順三設計の「八雲の家」（1979 年）でした。お祖父様がご縁で設計を依頼されたとのことでしたが、空間の持つ魅力が田中氏を建築の道へ歩ませたのは必然的なことだったでしょう。

― M 邸の建て主様とは家族ぐるみのお付き合いで設計のご依頼があったそうですね。
田中：そうですね。一つ一つのご要望に丁寧に応えて、なるべくお気持ちを活かした建物を作り上げたい、と感じていました。
今回のプロジェクトで正式に独立して事務所を立ち上げましたが、それまでの 4 年間、卒業した千葉大学の研究室の先生の下で、千葉大医学部同窓会を中心に集められた寄付金などによって建てられた「あのはな同窓会館（設計：鈴木弘樹＋鈴木弘樹研究室、2014 年 1 月竣工）」の実務設計を担当しました。天井高 9m以上のホールや 60 畳の和室があり、学生や卒業生、教職員が交流する場所として利用されており、普段は学生の部活動の会館としても機能します。学生に設計実務経験の場を与えるため、実務経験のある僕ら卒業生も関わって、設計が行われました。

千葉大の研究室にいる間も、自分の仕事は傍らで行ってきました。大学院を卒業してから最初に入った設計事務所が下吹越武人さんの A.A.E です。そこで、まず建築設計の実務を教えていただきました。その後、自分でも従兄の住宅設計を鎌倉で行いました。細かい要望があって、時間をかけて、きちんと一つ一つ学んでいく、という感じで作っていきましたね。高台にあるのですが、途中から道路がなく、手運びの工事でなかなかの難工事でした。
―それは大変だったでしょう。
田中：改修では、松戸で法律事務所の設計を行いましたが、既存スプリンクラーを移設するのを避け、R の壁で仕切って打ち合わせ用の個室を作るなど、コスト管理を行い、新たな空間を作りました。
親友の三軒茶屋の歯科クリニックは、「小さい子供からお年寄りの方まで、誰もが入りやすい木を使った、心地よい空間」を目指しました。それから、高校時代の友人がオーナーの松本のカフェの改修工事は楽しかったですね。いわゆるブックカフェですが、本屋さんが隣接していて、いろいろな人が集まる空間を意識する、面白い計画でした。
―大切にされてきたネットワークで、どんどん仕事が来そうですね。
田中：そうですね。今、高崎で住宅を設計していますが、それも建て主は友人で、一つの仕事が終わるとまた次に何か依頼があるという感じで来ています。今回のコンクリート造建築での緻密な設計・施工は新たなキャリアとなりました。
―そういえば、もともと経済学部でいらしたのに、その後、建築学科を目指されたのは、どういういきさつですか？
田中：大学は、経済学部に行けば潰しが効くという理由で進学しました。当時は勉強もせずに、このままではいけないと思い、進路変更をしました。今は、自分に合った仕事を見つけられたと思っています。また、寄り道はしましたが、その分いろいろな出会いに恵まれました。

―ご自宅は、先ほどから、とてもよい雰囲気の住宅だと感じていましたが、吉村順三さんの作品なのですね。
田中：祖父の知り合いの縁で依頼したそうです。生まれた時から、ここに暮らしていますが、ずっと改築もせずにここまで来ています。庭の桜は僕が生まれた時に植えられたものです。2 世帯住宅の先駆けのような建物で、今は隣に叔父の家族が住んでいますが、ここは M 様と違って、入口が最初から別なんですよ。
―築 30 年以上で、キッチンやリビング、階段のトップライトなど、時代の変遷にも影響されないモダンなデザインは、お仕事にも張り合いを与えてくれそうですね。本日はどうもありがとうございました。

「建物に託した人の思いを受けとめ、長く使っていただけるものをつくっていきたいですね」

田中　朋久

1978 年　東京生まれ
1997 年　慶應義塾高等学校　卒業
1999 年　慶應義塾大学　経済学部中退
2006 年　千葉大学大学院自然科学研究科建築学専攻修了
2006 年　A. A. E.（～ 2008 年）
2010 年　千葉大学工学研究科・特任研究員（~2014 年）
2015 年　田中朋久建築設計事務所　設立

②松戸の法律事務所③三軒茶屋の歯科クリニック④松本のカフェ　撮影：出口泰之

TOPICS/INFORMATION

「木を残す」 ー「目黒 M 邸」 現場工事から―

今月ご紹介した「目黒 M 邸」では、敷地に立っていた松の木をそのまま残す形で工事を行うことになりました。自宅を建て替える際に、長年ともに過ごした樹木の保存を望まれる方は少なくありません。このようなとき、現場ではどのような対応を行うのか、M 様、設計者様のご協力をいただきましたので、ご紹介させていただきます

1．着工前の事前調査時　（写真①②参照）

着工前より、敷地内の松の木はお客様にとって「命の次に大切なものだ」と聞かされていました。建物の形状は、平面的には松の木を囲うようにコの字に計画されているので、着工前の敷地形状、現状地盤高さの確認の他に、松の木の形状、位置、枝の範囲の確認を行う必要があります。後日行う遣方出し時に建物と松の木との正確な位置の確認となりますが、事前調査時に簡易的に実測した結果は松の木と建物はほぼ干渉しない（外部足場には干渉するおそれあり）ことがわかりました。あとは地業工事業者と現地で打合せをし、実際の敷地の状況を確認しながら資材（鋼管杭、山留杭など）や打ち込み重機の搬入の計画を行います。こちらも松の木に資材、重機が干渉しないように注意して計画しなければなりません。

2．捨コン打設（写真③）

地下室の形状は L 型、1 階から上がコの字の形状です。2 次根伐完了までは松の木をうまく避けるように、残土搬出ルート、重機の設置場所を考える必要がありました。捨コン打設も松の木を痛めないように細心の注意を払いました。

これだけ大きな松の木なので、根の張り具合の範囲もかなりの大きさが予想されます。お客様が依頼されている造園業者様と数回打合せをさせていただき、太い根は根伐の範囲にはないだろうとの確認が取れました。一部、直径 30mm 程度の根も出てきましたが、きれいに切断し、切断面には薬を塗れば大丈夫との話でした。

ちょうど夏の暑い時期でした。夕方協力業者が帰った後に、現場の進捗状況を確認しながらの松の木への水撒きは、毎日の日課となっておりました。静まり返った現場内で、ジャブジャブ水撒きするのも思いの外、楽しい作業でした。

3．地下躯体生コン打設（写真④）

地下の鉄筋型枠作業も完了し、いよいよ生コン打設の日を迎えました。地下室のない部分も上階の基礎が必要なので、③の写真のように敷地内に作業車を設置することはもうできません。松の木側の前面道路を使用して打設したかったのですが、松の木と電線にポンプ車のブームが接触してしまうので、やむなく脇の狭い方の道路を通行止めにして生コン打設を行いました。

4．外構塀生コン打設（写真⑤）

躯体工事も無事完了し、最後に外構塀の生コン打設です。躯体工事中は外部足場に干渉する枝を、前述の造園業者様に松の木を痛めないギリギリのところまで曲げて頂き、なんとか無事に躯体作業を終えることが出来ました。塀も化粧打ち放しのコンクリートなのですが、松の木の枝の下にもコンクリートの塀を作るので、これもまた、松の枝を折らないように葉をコンクリートの飛沫で汚さないように、細心の注意を払って打設する必要がありました。

外構工事も完了し、お引き渡しした後、周囲を囲っている無機質のコンクリートと、真夏の猛暑の中、青々と茂る、有機物の塊のように見える松の木との対比を眺めながら、「枯れなくて本当に良かった」とほっとした次第です。

（現場報告：工事部　鈴木拓司）

①

②

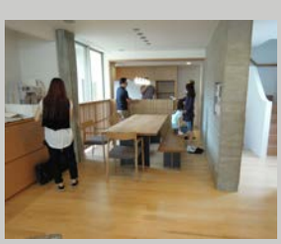
③

④

⑤

「 上大崎の住宅」内覧会　　9 月 19、20 日

都心の閑静な住宅街に、子育て、老後の暮らし方に配慮した 2 世帯住宅が完成、内覧会が行われました。
化粧型枠の打ち放しコンクリートの外観、優しい肌触りの素材で丁寧に作りこまれた内装が特徴です。



構造：RC 造
規模：地下 1 階　地上 3 階
用途：専用住宅
設計：LEVEL Architects
完成：2015 年 9 月

「 恵比寿 N ビル@YAMANOTE LINE 見学会」　9 月 26 日

JR 線路際に位置するテナントオフィスビルが完成し、内覧会が開催されました。線路上方に広がる景色を最大限取り込んだスペースは、明るく開放的です。鉄道ファンには、仕事の合間、癒しのひとときをもたらしてくれそうです。

構造：S 造
規模：地上 7 階
用途：事務所
設計：上西明
　／上西建築都市設計事務所
完成：2015 年 9 月

編集後記

・列島各地で台風の被害が出ています。日頃の準備を忘れないようにしたいものです。「まさか、こんなところで・・」という被害者の言葉を戒めにしたいと思います。

(株)辰 通信　Vol.187　発行日　2015年10月10日　　編集人：松村典子　発行人：森村和男
〒150-0002 東京都渋谷区渋谷3-8-10　TEL:03-3486-1570 FAX:03-3486-1450　E-mail：daihyo@esna.co.jp　URL :http ://www.esna.co.jp